

第 35 回全国大会内田洋行ユビキタスにて開催



吉川 寛 日本「アジア英語」学会会長大会冒頭挨拶

第 35 回全国大会プログラム

大会総合司会：齋藤智恵(国際医療福祉大学)

10:00-10:10 大会実行委員長挨拶：竹下裕子
(東洋英和女学院大学)

会場担当挨拶： 保木浩一(内田洋行)

会長挨拶： 吉川 寛(中京大学)

10:10-11:40 基調講演：

『アジア進出の成功法：中国、タイ、ベトナム、ミャンマ
ーにおけるコミュニケーション

—新たな「紙の道」の開拓を通じて』 (in Japanese)

建石洋一 (国進印刷株式会社 代表取締役)

11:40-12:00 会員総会

12:00-13:20 昼食休憩

13:20-15:25 研究発表 (in English)

司会：三宅ひろ子(昭和女子大学)

1. English Syntax of Japanese Basic-Level English
College Learners: Problematic or Functional?

Nobuko TRENT (Aoyama Gakuin University)

2 Learners' Perceptions toward English Varieties in
Terms of Autonomous Levels

YAMAMURA Hikaru, WAKAMATSU Yasuko,
HAMADA Yo (Akita University)

3. An Ideological Struggle with the Notion of the
“Native English Speaker”: A Case Study of
Self-study ELL Books and Readers' Reactions

TAJIMA Misako (University of Technology,
Sydney)

4. The Functions of Extended Loop Sequences in
Japanese English Backchannel Interactions

IKE Saya (Sugiyama Jogakuen University)

Jean MULDER (University of Melbourne)

5. From Sociolinguistic Competence to EIL
Sensitivity: Exploring the Possibility of EIL
Sensitivity as an International Communicative
Competence

SAEKI Takuya (Waseda University)

15:25-15:40 休憩

15:40-16:20 内田洋行・施設見学ツアー

16:20-16:30 休憩

16:30-17:50 シンポジウム 「グローバル時代
における英語教員養成」 (in Japanese)

司会：藤原康弘(愛知教育大学)

発題者：「英語の二面性：言語学習と言語運用」

柴田美紀(広島大学)

「目標言語の多様性と英語の多様性への気づき」

藤原康弘(愛知教育大学)

「言語文化観の〈ゆさぶり〉と英語教員育成の試み」

仲 潔(岐阜大学)

17:50-18:00 閉会の辞: 米岡ジュリ(熊本学園大学)

第 35 回全国大会を終えて

大会実行委員長

竹下裕子(東洋英和女学院大学)



大会実行委員長挨拶:
竹下裕子(東洋英和女学院大学教授・JAF AE理事)

第 35 回全国大会は 2014 年 12 月 13 日(土)、東京都中央区の内田洋行・東京ユビキタス協創広場 CANVAS で開催された。全国大会の東京開催は、2012 年 12 月の文京学院大学以来、2 年ぶりのこと、さらに大学施設以外を開催場所とするのは、学会設立以来、初めてのことであった。

内田洋行は、事業の 3 本柱のうちのひとつ、公共関連事業において、教育機器・教材・コンテンツの製造・販売、ICT システムの構築、学校空間デザイン・家具販売・施工等々を通じて、教育市場で意欲的に活動しているため、大学関係者とも接点が多い。これまでも CANVAS ではさまざまな教育的イベントや学会が開催されてきた。内田洋行が特にユビキタス協創広場にこめたコンセプトと最新設備には目を見

張るものがある。

本大会のもうひとつの新たな試みは、基調講演を単独主催ではなく、NPO 法人グローバル・ヒューマン・イノベーション協会との共催で行ったことであった。京都より国進印刷株式会社の建石洋一代表取締役役をお迎えし、『アジア進出の成功法:中国、タイ、ベトナム、ミャンマーにおけるコミュニケーション—新たな「紙の道」の開拓を通じて』と題した講演をいただいた。ミャンマーは、本学会の次期スタディツアーの有力な候補地である。今後、アジアの英語をもちいてさらに活発なコミュニケーションが行われると期待される地域に関する、貴重な実践的・経験的な内容の講演であった。

午後の研究発表 5 件はどれも、緻密な研究と考察に基づいた、興味深いものであった。すべてが英語を発表言語としたことに加え、広い舞台、そしてその背面の広大なスクリーンに映し出された発表資料の効果も手伝って、伝統的な学会研究発表というよりは、TED Conference の講演のような雰囲気にあふれていた。

シンポジウム「グローバル時代における英語教員養成」は、柴田美紀氏、藤原康弘氏、そして仲潔氏の 3 名が発題者によって進められた。聴衆の多くは、すでにグローバル時代における英語学習者の指導に携わっているのであるが、シンポジウムが提示した課題は、我々経験者であっても、あらたに襟を正し、背筋を伸ばして現状を見つめ、これから行くべき道に思いを馳せるための貴重な機会を与えてくれたように思う。

かくして、今大会のプログラムは、参加者全員のご尽力をいただいて完結した。全国大会の東京開催が、何年も先にならずに実現するように、年末と年度末に向かう会員各位が健やかであるように、そして 2015 年 7 月、中京大学で再会することを願いながら、散会したことをご報告申し上げたい。

基調講演・研究発表レビュー

田中富士美
(中央大学・JAF AE ニュースレター担当)

基調講演: 建石洋一氏

(国進印刷株式会社 代表取締役)

『アジア進出の成功法: 中国、タイ、ベトナム、ミャンマーにおけるコミュニケーション - 新たな「紙の道」の開拓を通じて』



基調講演: 建石洋一氏(国進印刷株式会社 代表取締役)

今回第 35 回全国大会は、大会開催史上初の当学会、民間企業、NPO 法人の合同開催となり、基調講演においても、大阪の会社経営者である、国進印刷株式会社代表取締役、建石洋一氏が登壇された。建石氏の会社は 2003 年より中国を皮切りに、タイ、ベトナム、ミャンマーに進出されている。この講演では、アジア進出においてビジネスにおけるコミュニケーション、異文化理解、人について、仕事の方法の違い等を様々なエピソードを交えてお話しになった。

2002 年建石氏は上海におけるビジネスの機会を求めて現地視察を行った際、偶然の縁から人の輪が広がり、翌年に提携の話が進むこととなる。機械だけでは完成が難しい印刷物を人件費のコスト減のために発注、それが成功を生み 2003 年に営業所を開設される。それが「紙の道」開拓の原点となった。2006 年

から 2007 年はベトナムに工場をもつこととなる。中国の工賃高騰と中国元の切り上げリスクが要因であった。中国とベトナムは政治的理由から当局への出版許可がすべての出版物に必要であったり、中国では現場の人間関係として上下はうまくいっても横の繋がりの構築が難しいなどの問題点を見た。2007 年にはベトナムにも工賃高騰がおき、さらなる展開を求めてカンボジア、プノンペンに調査にはいるが、当時のカンボジアは内需拡大で国内の発注のみで手一杯と知り、それに従い 2008 年にはタイ、バンコクでの調査に入る。プノンペンも並行してさらに機会を伺うがインフラの不安定により断念、2009 年にバンコクに自社工場を建設され、そして 2012 年から進出したミャンマー、ヤンゴンにも工場を設立され、「紙の道」の開拓が続けられている。タイは資本主義、親日であり、人々も寛容、ビジネスもスムーズに感じるということで、建石氏は「タイ人は気持ちで動いてくれて、タイ人が好き」という個人的な感想を述べられている。

講演の結びには「和僑」とよばれる東南アジアでビジネスを成功させる日本の若い世代の人々の例を紹介された。

研究発表

今大会の研究発表は 5 件、すべて英語での発表であった。青山学院大学のトレント信子氏は **English Syntax of Japanese Basic-Level English College Learners: Problematic or Functional?** で、日本の大学生の英語能力のレベル別に集めた構文データより、母語である日本語の影響における主語の設定の観念の違いからおきる主語の間違い、主語の脱落についての分類をされ、主語の間違いが起きたものほとんどが 'Sunday is dating' のような Topic subject、発話のテーマがそのまま主語になるものであるということであった。日本語も主観・世界観と英語の主観・

世界観の違いから起きる、主語の脱落は、その主観・世界観の違いを授業で指導することで、改善がされたこともデータからみられる。しかしながら ELF を意識すると、このような日本語の主観・世界観の影響が Japanese English を形作っていくことも看過できないと述べられている。

秋田大学、山村耀、若松庸子、そして濱田陽の3氏による Learners' Perceptions toward English Varieties in Terms of Autonomous Levels では、発表者の大学にある Autonomous Language Learning Rooms 言語自律学習室において、多様な英語・英語変種の受容と寛容について、自律学習の意識が高いことと、その受容と寛容が正比例するものなのかという試論を基点に調査を行ない、その結果を分析した。



An Ideological Struggle with the Notion of the “Native English Speaker”: A Case Study of Self-study ELL Books and Readers' Reactions

を発表された、シドニー工科大学大学院の田嶋美砂子氏は日本の一般書として英語学習者対象に出版されている、日本で著名なアメリカ人英語指導者の英語教育書2点を挙げ、研究を行い、その native-speakerism に固執した内容に寄せられる読者の反応を分析、native-speakerism を疑問視しながら「では native speaker とは？」という観念を模索する反応を考察された。

椋山女学園大学の池沙弥氏とメルボルン大学の Jean MULDER 氏は The Functions of Extended Loop Sequences in Japanese English Backchannel Interactions において、英語話者の発話行動からそ

の相槌を打つという一番短い発話と、それにとまなう身体の動きを、日本人話者のグループ、オーストラリア人話者のグループ、日本人とオーストラリア人の混合グループの3グループの会話の状況を録画して調査を行なった。

最後の発表は早稲田大学、佐伯卓哉氏の From Sociolinguistic Competence to EIL Sensitivity: Exploring the Possibility of EIL Sensitivity as an International Communicative Competence であった。佐伯氏は、EILの認識を強く持つことがEIL使用者として欠かせない要素であるが、それは大きく 1. Ownership of English と、2. Critical Communicative Competence であると提言され、Ownership of English は non-ownership (deownership)、understanding of ownership、ambivalent ownership、substantive ownership、supra-self ownership を提示し、EIL 使用者にとって英語は自分のものであると示し、自身の言語的文化的枠組みでの英語使用も必要だが、同時に多様な文化コンテキストに合わせることも重要となると述べられた。

シンポジウム概要

田嶋美砂子(シドニー工科大学大学院)

第35回全国大会のシンポジウムは、「グローバル時代における英語教員養成」というテーマの下、行われた。最初に柴田美紀氏(広島大学)が English as a Lingua Franca(ELF)に関する理論的背景を説明した後、藤原康弘氏(愛知教育大学)と仲潔氏(岐阜大学)が具体的な教員養成実践例を紹介するという構成であった。

柴田氏によると、ELF の枠組を用いて日本の英語教育や教員養成を検討する際に留意すべき点は、

「言語学習」と「言語運用」という二つの側面を切り離して思考することであるという。つまり、「言語学習」において、「正しい」とされる学習英語の必要性は否定できず、また、学習者の誤りを指摘することも教員の責務であるため、そこに ELF をモデルとして導入することは適切ではないというのが氏の主張である。一方、「言語運用」においては、英語の多様性を尊重し、自らの英語に自信を持って意思伝達を試みる姿勢が求められるとし、そのような言語態度を育むことが英語教育や教員養成では重要であると結論づけられた。

告からは、講義名の限界を内容で乗り越えようと奮闘される様子が窺えた。



藤原氏からは、愛知教育大学が取り組んでいる「海外教育実習」(事業代表:ライアン・アンソニー准教授)とご自身の授業実践が紹介された。「海外教育実習」では、学生を3週間オーストラリアに派遣し、現地の小・中・高等学校で教育実習を経験させるそうである。氏によると、このプログラムの参加者は、日本語や日本文化を教えるという行為を通じ、目標言語である英語や教授体験を相対化することができるようになるという。また、担当の「英米文化講義」では、World Englishes / English as an International Language / ELF のみならず、英語帝国主義論も視野に入れた授業を展開しているとのこと。その実践報

仲氏の発表のキーワードは、「言語文化観のゆさぶり」である。氏の定義によると、「ゆさぶり」とは「さまざまな事象への気づきを与え、動揺させたり感動させたりすること」で、この発想を根底に据えて、「英語科教育法」の講義を行っているという。この講義で学生が課されるのは、主に授業案の作成と模擬授業であるが、それは決して直線的な作業ではない。「ゆさぶり」のポイントが随所に用意された講義や個別相談、オンライン上の議論などを通じ、幾度もの内省を経て、最終的な授業案を完成させていく。氏は、このような過程が批判精神と創造／想像力に富んだ英語教員の育成には不可欠であることをご自身の実践によって示された。

大言語の一つである英語を教える／研究するという行為を選択して以来、私はさまざまな自己矛盾を抱えてきた。「上手に発音できたね」と生徒を励まし、提出された英作文に赤を入れる一方で、ELF に関する論文を読む。英会話学校の広告をやや冷めた目で見つめる一方で、英語圏の大学院で学ぶ...など、その例は枚挙にいとまがない。しかし、今回のシンポジウムを拝聴したことで、その自己矛盾を十分自覚しながら、隘路をくぐり抜けていくことの重要性を改めて認識することができたように思う。

書籍紹介



言語と格差

杉野俊子・原隆幸 編著 明石書店 2015年3月
ISBN: 9784750341330

事務局より

第36回全国大会のお知らせ

日程:2015年7月11日(土)

場所:於 中京大学 名古屋キャンパス

大会情報、研究発表の詳細につきましては JAF AE
ウェブサイトをご覧ください

<http://www.jafae.org/meeting.html>

ニューズレター編集担当より

ニューズレターは会員の大切なコミュニケーションの場
ですので、会員の皆様からのご投稿を歓迎しております。
国内外の紀行文、書籍紹介、海外情報など、

「アジア」「英語」「言語」周辺をキーワードに、日本語
800~1,200字程度、あるいは英語ではA4用紙2/3
~1 ページ程度の分量でおまとめいただければ幸いです。
編集の都合上、投稿を希望される方はあらかじめ、
編集担当の田中 (fujimitanaka@gmail.com)
までご連絡下さるようお願い申し上げます

2015年3月20日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 吉川 寛

編集長 田中富士美

事務局 〒466-0825

名古屋市昭和区八事本町 101-2

中京大学国際英語学部 榎木蘭鉄也研究室

E-mail: jafae@live.jp

学会ホームページ: <http://www.jafae.org/>

年会費振込先:郵便振替 00280-8-3239

<< JAF AE Secretariat >>

Professor Tetsuya Enokizono

Department of World Englishes, Chukyo
University

101-2 Yagoto Honmachi, Showa-ku,
Nagoya, 466-0825 JAPAN

E-mail: jafae@live.jp

JAF AE's homepage

<http://www.jafae.org/>

JAF AE's postal transfer account number
00280-8-3239